NPO法人　大磯ガイド協会

照　ケ　崎

第55号
令和5年11月1日

〒255－0003　神奈川県中郡大磯町大磯 1933-1
TEL　0463－73－8590
ホームページ　https://www.oisoguide.com

関東大震災100年と大磯

副会長　渥美　和久

今年は関東大震災から数えて100年という節目の年にあたる。大正12年（1923）9月1日は明け方からにわか雨が降る不安定な天気であった。昼前頃から天候は回復し、地震発生時には晴れて穏やかな天気になっていた。

多くの家庭で昼どきの準備をしている最中、11時58分神奈川県西部を震源とするマグニチュード7.9の大規模な地震が発生した。この地震により、関東地方・山梨県では震度6を観測し、北海道道南、中国四国地方にかけて震度1から震度5を観測した。当時の震度階級は0～6までの7階級だが、家屋の倒壊状況から相模湾沿岸地域や房総半島南端では、現在の震度7相当の揺れであったと推定されている。家屋の倒壊、海では異常な引き潮がみられ、町民は安全な場所に避難した。「関東大震災」と名付けられた地震の被害は、照ヶ崎海岸の岩礁が約2m隆起。海岸が大きく広がり、沿岸の地形が変わった。記録によると大磯の被害は海岸のほか、主な建物の倒壊は大磯駅・大磯郵便局・大磯小学校・東光院・妙大寺・高来神社・日枝神社、そしてガイドでもお馴染みの滄浪閣・城山荘・禱龍館・旧陸奥宗光邸などがある。旧大隈重信別邸、旧木下建平邸は持ちこたえた。幸いにも大磯では火災、津波の被害は無かったが、何人かの証言によると、2mを超える津波が押し寄せたが、平塚から東側、江ノ島や鎌倉方面に逸れていったという。この地震によって、多くの別荘が被害を受け再建されずに大磯を去っていった人もいた。

地震後、耐震に関心が向けられ建物基礎は、従来の自然石基礎から、コンクリート布基礎へと大きく変化し、鉄筋入りの基礎となった。大磯では昭和30年代後半まで、鉄筋入りの布基礎はあまり普及していなかった。しかし、城山荘や旧池田成彬邸は、すでに昭和初期に躯体の耐震構造で建設された。

震災後、海水浴場は照ヶ崎海岸から北浜海岸へと東側へ移り、現在では海抜11mの高さの津波避難タワーが整備されている。

――― 今後の企画ガイド他予定―――

No.	月日	企画ガイド（略称）	No.	月日	企画ガイド（略称）
1	11/18（土）	明治27年の古地図散策	5	12/17（日）	会員研修：三井財閥
2	11/25（土）	共催：城山公園アート散歩	6	1 /14（日）	左義長
3	12/ 2（土）	共催：城山庵お点前	7	2 / 4（日）	共催：吾妻山の菜の花・国府
4	12/ 9（土）	紅葉の湘南アルプス（英語）	8	2 /10（土）	大磯の梅の名所

活　動　報　告　　令和5年8月～10月

―――共催ガイド「旧安田邸と駅周辺散策」―――

9月16日（土）　お客様45名　ガイド6名

久方ぶりの旧安田邸の訪問。邸内では、金融の第一人者として、一流の人と対するために人格・見識を磨いてきた安田善次郎翁の多彩な書画や茶室をご覧頂いた。庭園では、翁が朝日平吾に暗殺された現場で、二代目善次郎により建立された持仏堂や五輪塔を案内した。持仏堂や経堂、唐破風平唐門は大磯に住んだ日本画家安田靫彦の設計であり、その美しさを堪能していただいた。旧安田邸の後は、旧島崎藤村邸、明治記念大磯邸園、新島襄終焉の地へと向かう。町民が自由に回遊できる行楽地「寿楽園」を造ろうとし、裸一貫で身を興し日本を代表する財界人となった翁の生き様が伝わるように努めたガイドであった。　（磯川　寛光）

――企画ガイド「松本順の生涯と大磯での生活」――

9月23日（土）　お客様26名　ガイド4名

小雨が降りだした中、大磯宿の尾上本陣跡で江戸宿場町としての繁栄していた時代を想い、明治維新後の宿駅制度の廃止に伴い衰退してしまった大磯の町の写真を見て頂いた。陸軍軍医総監を退いた「松本順」は、明治18年に大磯に国内初の海水浴場を開設し、伊藤博文に働きかけ東海道線に「大磯駅」を実現、歌舞伎役者を呼んで大磯の良さを広めた。その後、政治家、実業家、文化人などが次々と別荘を持ち、衰退していた大磯は一大別荘地へと発展、明治後期には「海内第一避暑地」の称号を頂いた。ガイドではその証である駅前の石碑、照ケ崎海岸に大磯町民が感謝の印として建立した「松本順先生謝恩碑」などをご案内した。

雨も上がり、「松本順」が館主となり海水浴旅館と診療所を兼ねて建設した「禱龍館」跡や、鴫立庵にある家族とともに眠る丸い墓石「守」の意味を話し、国民の健康増進のための牛乳の普及に努め、大磯にも牧場を開いた功績についてお伝えし、妙大寺では松本順のお墓をお参りした。

お客様は、「海水浴」だけではなく、正露丸、牛乳、マスクと、現在へも繋がる「松本順」の功績や、大磯が日本を代表する別荘地へ発展していった歴史について関心を新たにされたようである。　（齋藤　昭彦）

―――共催ガイド「吉田茂のガーデンパーティー」―――

10月1日（日）　入園者数約870名　ガイド47名

昨年に続き「旧吉田邸を出会い・発見・おもてなしの場として、町内外の来場者を楽しませる」をコンセプトに開催されました。当日、私は庭園での吉田茂役を担当し、紺の和服・白色ハット・白足袋・雪駄とステッキで仮装し、吉田茂になりきってお客様との会話を楽しみました。大勢のSPを引き連れて来場された河野太郎大臣にも「ようこそ我が家においでくださいました」と挨拶しました。

季節外れの暑さと湿気もあり大変でしたが、来場者はクイズラリーやジャグリング、邸内の尺八・ヴァイオリン演奏、庭園の手回しオルガン等のイベントに満足されていた様子で「お祭り」とはちょっと異なる雰囲気を楽しんでいらっしゃいました。　（二塚　行雄）

――――――企画ガイド「大地の誕生の秘密・国府」――――――

10月7日（土） お客様36名　ガイド6名

秋晴れのさわやかな風を受け、お客様5名と五感を通した大磯誕生の秘密を探るハイキングに出発。500万年前のこゆるぎ海岸の大磯層では「ざらざらしている。黒と茶色の縞模様の地層。こんな近くにも500万年前の地層があるなんて」。 源頼朝が妻政子の安産祈願を命じた真楽寺跡の50万年前の二宮層では「こゆるぎ海岸と全く違う。粘土っぽい土でできている」。 8万年前の西小磯の丘陵地では「8万年前の海岸が隆起したんだ。説明にあった平たい丸みを帯びた石を探してお土産にしよう」。 20万年前の寺坂斜め地層（写真）では「わあ、凄い」の一言。普門寺北切通しの500万年前の鷹取山層では「こゆるぎ海岸とは違う地層。海底の谷に堆積すると、こんなになるのだ。玉ねぎ石に触っていこう」。一人ひとりが視覚、聴覚、触覚を通し大磯誕生の秘密に迫っていった。　（小林　恭一）

――――会員研修 「朝鮮の歴史」――――

8月19日（土） 参加者42名

佐竹明雄会員を講師として、三国時代から日本への併合・現在にいたる二千年を超える朝鮮の歴史に関する研修が開催された。この研修により、三つの課題を深く認識した。第一はユーラシア大陸から突き出た朝鮮半島の地政学的リスクである。明治時代の日清戦争と日露戦争は朝鮮を巡る周辺国と列強の思惑の違い、対立から起こった戦いであり、その後は日本統治時代、朝鮮戦争、南北朝鮮分断という悲しい歴史をたどっていること。第二は約五百年続いた李朝鮮時代の基本思想である事大主義と中華思想・小中華思想に儒教思想が加わり、優越な長男の中国と次男の朝鮮（韓国）、劣等な日本という認識が現在においても民族意識の根底にあること。第三は歴史認識に関する理解がとても重要であること。歴史認識とは、過去の歴史的事実をそれぞれの時代に生きる人々がどのように考え、どの部分にどのような重要性を見いだすかという問題である。佐竹講師が研修の最後に述べられた客観的事実の積み重ねにより歴史の流れを把握し、俯瞰し、未来を予測することが大切であり、日韓の歴史認識の乖離に対しても、お互いの歴史の具体的な事実に関心を持ち、冷静に未来志向で対話を重ねることが欠かせないと思う。素晴らしい研修を受講することができたことに感謝を申し上げる。　（奥井　泰弘）

――――― 研修旅行　ジョサイア・コンドルの建築を訪ねて――――

9月9日（土） 参加者25名

今回は大磯にもその作品を残した建築家ジョサイア・コンドルの作品を訪ねる研修旅行として、旧岩崎邸庭園（写真）、東京大学本郷キャンパス、旧古河庭園を訪問した。澤田美喜の生家でもある旧岩崎邸庭園ではコンドル設計による木造の洋館・撞球室、大工棟梁大河喜十郎施工と伝えられる和館を、東大では「ジョサイア・コンドル銅像」、安田善次郎寄付による「安田講堂」を、旧古河庭園ではコンドル設計による邸宅・洋風庭園、七代目小川治兵衛作庭の日本邸園を見学した。旧岩崎邸、旧古河邸は、共にコンドルの代表作であるが、全く趣を異にする建物である。特に最晩年の作である旧古河邸は、1階は洋室2階は和室になっており、2階の和室に洋の空間と和の空間をつなぐ「調和の空間」を設けた独特の設計となっている。コンドルが日本の建築を理解する上で日本画や日本舞踊を習い、また、日本庭園、華道、茶道、寄席等々多岐にわたり日本文化への理解を深めた人であることを知り、ジョサイア・コンドルに対する認識を一新した研修旅行であった。　（宮川　正弘）

特集　高麗山の植物 Ⅳ　　金子 正美

高麗山は大磯駅からのアクセスもよく、手軽に登ることができて風光明媚なことから人気の低山である。また、自然も豊かでとくに生育する植物の種類は多い。今回は11月発行ということで、これまでのように花ではなく、実に注目してみたい。奇麗な赤い実をつける植物を3つ紹介する。

まず紹介するのはガマズミ（莢蒾/レンブクソウ科）である。名前の由来は諸説あるが、その丈夫な材を鍬（カマ）の柄に用い、果実を染（ソメ）物に用いたことから「ガマズミ」と呼ばれるようになったという説がよく知られている。葉の裏面には全面に細かい点があり、葉の付け根付近には大きい点が2～3個ある。これらの点は腺点と呼ばれ、そこから光合成で得た糖類を分泌し、アリを呼び寄せて害虫を駆除してもらっている。9～11月頃に赤く熟す実にはビタミンCやポリフェノール類が多く含まれ、高血圧や動脈硬化など生活習慣病の予防効果が期待できるそうだ。

ガマズミ

次に紹介するのはイイギリ(飯桐/ヤナギ科)である。木の姿が桐に似ていて、昔、葉で飯を包んだことからの命名。葉が大きく、枝が横へ広がり、直径1mを超すような大木になる。成長も早いため、夏に木陰を作る目的で公園などに植えられることが多い。高麗山では東天照付近に10mを超す大木が何本かある。12月頃、多数の赤い実の房が垂れ下がってつく。実に毒はないが苦味が強いため野鳥にはあまり人気がない。他の美味しい実が無くなってしまうと、しかたなくヒヨドリが食べに来る。その間、葉がすっかり落葉した樹に鮮やかな赤い実がつく姿は、青空に映えて美しい。強風で地面に落ちた赤い実はクリスマスの飾りにも最適。

イイギリ

最後に紹介するのはヤブコウジ(藪柑子/サクラソウ科)である。冬でも赤い実が落ちないことから正月の縁起物ともされ、マンリョウ（万両/サクラソウ科）やセンリョウ（千両/センリョウ科）、カラタチバナ（別名百両/サクラソウ科）と比べて実の数が少ないことから別名「十両」とも呼ばれる。斑入りなどの変異株が江戸時代より選別され、古典園芸植物の一つとして栽培されていた。現在では約40の品種が保存されている。明治時代にも大流行があり、現在の金額で1000万円に相当する高値で取り引きされたこともあったという。ヤブコウジのブームは大正時代後期まで続いた。

ヤブコウジ

これで「高麗山の植物」の連載は終了する。紙面の都合で各回3種類、合計12種類の植物を紹介したが、高麗山にはまだまだ魅力的な植物がたくさんある。私がガイドする「森林インストラクターと行く大磯高麗山自然林の植物」では季節に合わせた高麗山の植物を案内している。詳しくは当協会ホームページをご覧いただきたい。

【編集後記】 災害は忘れた頃やって来る。巻頭に渥美副会長の「関東大震災100年と大磯」、巻末には4回にわたって連載された「高麗山の植物」が最終回を迎えた。改めて大磯の魅力を再発見した内容であった。コロナで停滞していた活動も回復しつつあり、吉田邸ガーデンパーティーでは協会が主役の活躍ぶりを示した。安田邸、松本順、大地の誕生、久しぶりの東京への研修旅行、そして会員の地力を高める研修「朝鮮の歴史」など活発な活動を満載した「照ヶ崎 55 号」をお届けしたい。　（鈴木　泰子）